先生なら、どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

探究学習に没頭した生徒が直面した壁。通じない電話の向こうに教師が描いたその姿とは

宮崎県立宮崎東高校
定時制課程夜間部
西山正三

にしやま・まさみ●同校に赴任して6年目。理科。4学年担任。前任校の宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校で探究学習に長くかかわる。現任校では、哲学対話などを通して生徒が自ら見いだした課題に取り組み、進路実現につなげる探究学習を構築した。

「先生、少しいいですか？」。遠慮がちに話しかけてきた2年生のAさんは、「最近読んだ本にこんなことが……」と、明治時代の日本人の価値観について私に語り始めました。中学1年次から不登校を経験し、学校では1人で本を読んでいることが多いAさんが、たまっていた知識を吐き出すように語る様子を見て、彼女は自分の学びを受け止めてくれる相手を探しているのだと気づきました。「Aさん、毎週水曜日の放課後の30分間、今日みたいに先生と話す？」。私のその提案を受け入れたAさんは毎週、文学や思想などのテーマで私に話をしてくれました。内容が高度で、私はうなずくことしかできないこともありましたが、話した後のAさんはすっきりした表情になったように私には見えました。

そんなAさんが探究学習に没頭したのは必然だったのでしょう。驚くような質と量の文献と格闘しながら、明治時代の民衆が日清戦争や日露戦争に賛同した理由を考察する彼女の助けになればと、私は本校の探究学習を支援する社会人からAさんが意見をもらう機会を設けました。大人たちはAさんの深い洞察に敬意を示すように、Aさんを子ども扱いすることなく意見を述べ、Aさんもそれに真摯に耳を傾けました。

ところがAさんは、その直後から学校を休みました。携帯電話にかけても、電話でのやり取りが苦手な彼女が私の電話に出ることはありません。思いあたる理由は探究学習だけです。社会人の真剣なフィードバックに傷ついてしまったのだ。繊細なAさんには時期尚早な場だったのかもしれない。Aさんが今度学校に来たら、自分の配慮が足りなかったことを謝ろう。私の心の中はそんな思いでいっぱいでした。でも、心の隅では「家で探究学習に没頭しているのかも」と、希望も抱いていました。もしそうなら、何度も電話をかけるのは彼女の思索の邪魔になる。耐えるようにAさんの登校を待ちました。

1週間後、Aさんは何事もなかったかのように、「これを見てください」と、探究学習についてまとめたスライドを持って学校に来ました。社会人の助言を基に見事に練り直したスライドを見て驚く私にAさんは、「寝るのを忘れるくらい集中しました」「すごく幸せな時間でした」と、満足げな表情で言いました。学校を休んだことも、電話に出なかったことも、私はとがめませんでした。学びの才能がたくましく開花した瞬間に立ち会えた感動を、Aさんのそばでただただかみしめていました。

西山先生はAさんとのやり取りの中で迷うことはなかったのか。どのような信念を持ってAさんと向き合ったのか。Aさんの探究学習のその後も紹介したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。

https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article28004/

イラスト：カモ